カナダ研究の潮流(3)—多文化主義

英仏系以外の民族に照射

デビッド・スミス

カナダ研究の動向を文献から概観するという試みも、早や3回目を迎えた。今回は、多文化主義（multiculturalism）の研究を取り上げてみよう。

カナダは、ご承知のように、多民族社会である。この多民族性という性格の及ぼす影響について、研究者が関心を向けるようになったのは、比較的最近のことである。ただし、次の3点は例外だ。J.T.M. Anderson著 *The Education of the New Canadian*（Toronto: J.M. Dent, 1918）、およびシリーズ*Canadian Frontiers of Settlement*（Toronto: Macmillan, 1936 and 1940）のC.A. Dawson他著*Group Settlement: Ethnic Communities in Western Canada*（第7巻）と*Pioneering in the Prairie Provinces: Social Side of the Settlement Process*（第8巻）。そしてRobert England著 *The Central European Immigrant in Canada*（Toronto: Macmillan, 1929）。

政府が関心を喚起

さて、多文化主義に対する今日の活発な関心を喚起・奨励したのは、連邦政府や州政府であった。そのきっかけとなったのは、1969年の連邦政府への報告書*Report of the Royal Commission on Bilingualism and Biculturalism*（Ottawa: 1969）の第4編"The Cultural Contribution of the Other Ethnic Groups"である。州もまた、多文化主義への関心を育成するのに熱心で、政府部内に専門の担当部署や機関を設けたりしている。平原3州では、とくにこの傾向が強い。マニトバ、サスカチュワン、アルバータの平原3州では、連邦政府と同様、従来から多文化主義の研究成果の出版に助成金を出してきた。

現在では、各地の研究グループにより多数の本が出版されているが、紙面の制約上、ここにご紹介できないのが残念である。また、出版各社の図書目録を埋めている各種の回想記も見逃せない資料だが、これも別の機会にゆずらなければならない。ここでは、比較的一般性の濃い研究を若干あげておこう。まず、Howard Palmer著 *Immigration and the Rise of Multiculturalism*（Toronto: Copp Clarke, 1975）、そしてGeorge Woodcock and Ivan Avakumovic著 *The Doukhobors*（Toronto: McClelland Stewart, 1975）。Wsevolod Isajiw編 *Identities: The Impact of Ethnicity on Canadian Society*, Canadian Ethnic Studies Association, V（Toronto: 1977）も、非常に興味深い本だ。

著者のIsajiwは、この本（および他の論文）の中で、言葉というものが単にコミュニケーションの手段としてでなく、社会化の手段としてあるいは集団の象徴としての意義をも持っているのだという、重要な指摘を行っている。これは確かに真理である。だがこの真理も、従来の多文化主義研究にあってはとかく看過されてきたし、もうひとつの歴史的事実、つまり（英仏系以外の）ヨーロッパ人がカナダ東部へ移住してきたのが第2次大戦後であったのに対して、西部への移住はその30年以上前から始まったという事実もまた、見逃されがちだった。

2言語主義政策との関連も問題

多文化主義自体が、そもそも論議の対象である。多文化主義といっても、政府の政策という次元においては、（英仏両語以外の）第3の言語の教育が全く問題にされていない。連邦政府の推進する2言語主義（bilingualism）政策と多文化主義とはどう関係するのかも、議論の分かれる所である。この点については、たとえば、A.W. Rasporich編 *The Social Sciences in Public Policy in Canada*（Vol.1, Calgary, 1979）の中の論文、Jean Burnet, "Separate or Equal: A Dilemma of Multiculturalism"を読んでいただきたい。多文化主義に対する連邦政府の立場を知りたい人には、K.G. O'Brien, J.G. Reitz およびI. Kuplowskaの共同執筆になる*Non-Official Languages: A Study in Canadian Multiculturalism*（Ottawa: 1975）と*A National Understanding: Statement of the Goverment of Canada on the Official Language Policy*（Ottawa: 1977）の2冊が参考になるだろう。いずれもカナダ政府が発行したものである。

雑誌で最も参考になるのは*Canadian Ethnic Studies*。14年の歴史をもつ伝統ある研究誌である。

以上、今回は、多文化主義の研究文献をいわゆる"第3のカナダ"を扱ったものに限った。ここではふれなかったが、原住民の研究は最近急速な成長を見せている分野であり、今後の成果に注目すべきだろう。そのほか英国系カナダの研究、あるいはフランス系カナダの研究についても、今回はふれなかった。英国系カナダについては、カナダに対するその貢献を意識的に追究した文献がほとんどないからだ。一方、フランス系カナダの研究はさかんであり、英語で書かれた文献もたくさん出されている。次回は、このテーマを追ってみたい。

（カナダ講座担当客員教授）